包丁

その暑熱の昼に僕は見た
熱にうだる包丁が喘ぎながらふらふら漂うのを
なるほどこの自由な世界だもの
包丁だって散歩をする権利ぐらいあろうさ

そいつは罪を怖れていたに違いない、殊勝にも
何故なら血の跡など全くついていなかったからだ
僕は感心したので、そいつに話しかけ
噴水のありかを指し示してやった

(1991.7.21)